蓮華寺略記

イ 5
12
3

15
門 ~~曽10~~ 2
部 1 3
巻

蒹葭堂雑録巻之三

浪華　前鑑成曉　晴翁撰

本草綱目云石蟹ハ南海ニ生ゼ是尋常の蟹年久〳〵水中に有て終に石と成物なり尚石蛇石蠶石鼈或石燕の類なりて多く物の化する処なり補の石とするに或栗樹の老樹石に化するもの往々見及ぶて珍う〳〵又溪澗の激湍水渚々と相激て終に形と成て其似る処の物准じて以之と名るもの數なりて奇とするに足ぬ

ゆふ蒹葭堂所藏の木豬と云るなり是ハ往昔地に堀て得ところにして朽木の化せしものゝ其大さ凡二尺餘あり則耳目鼻口ほゝぐゝ具り且蠹痕全體に有て恰も毛のごゝく其自然の妙言語に絶せ故に公侯貴族の献覽ふそ又賞美ふかゝる処なり今尚家に秘藏せ兎に僧義端の記あり俱に摸写して次に出せ

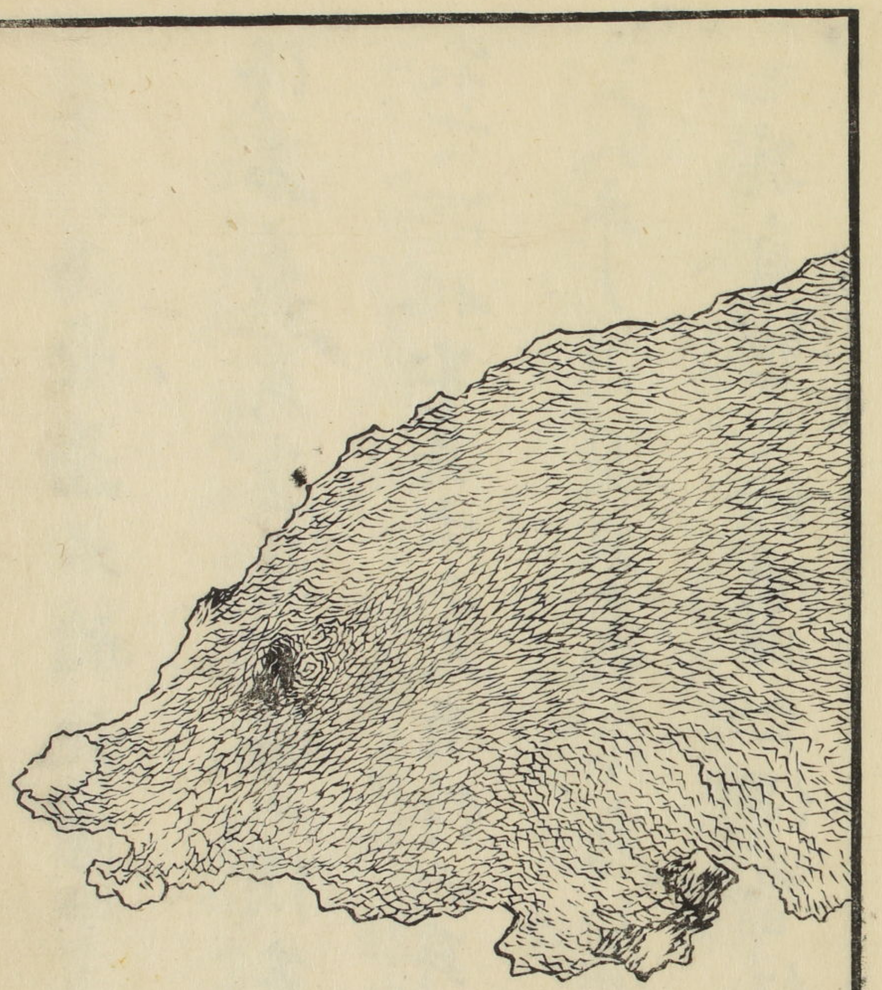
此書結束
石田藏書印

木猪之圖　蕪葭堂藏

高サ　廣キ所ニテ一尺許　曲尺

横　同　一尺九寸余

木ハ薄平めふ
て形面あり



豬記

很羣蠢蠢豕之義本豬一頭蓋古杙
木之所化宋其大二尺有餘而耳目鼻
口宛乎恣具且毳衣磨之編體若
毛其自然之紬偃師之倡魯般之鳶
不啻也其主人本世肅謂予曰初
吾先人將營吾墨也適掘地得之乃
戲居諸庭樹之間視者瞿然未嘗不
曰豬子何來加之風雨暴至竹樹
飄搖則身毛蚍蜉蠕蠕之狀因奇

之而幸藏之又以延享丁卯之夏嘗
辱吾派蕭留臺幕勢州太守
阿部公之覽愈益深藏以至今
矣而未得其說敢請君人為詳之
予曰唯〻失豬也在禽應室星室

星為營制宅室之應故夏時儆
曰營室之中土功其始則知當
乃先人如乃土功而得之者是乃先
人宅乃室得其時而宅其功之祥
柔烏虖乃先人之功果既宅而乃

子孫永受厥賜焉則宜藏之以
俾乃子孫知乃先人嘗乃世得其
時成其功其祥如是也哉肅曰善
因記爲以俟後之
寶曆辛巳冬十月

臺浦雲杉山沙門義鈞記

沈義 西東 錢貞書

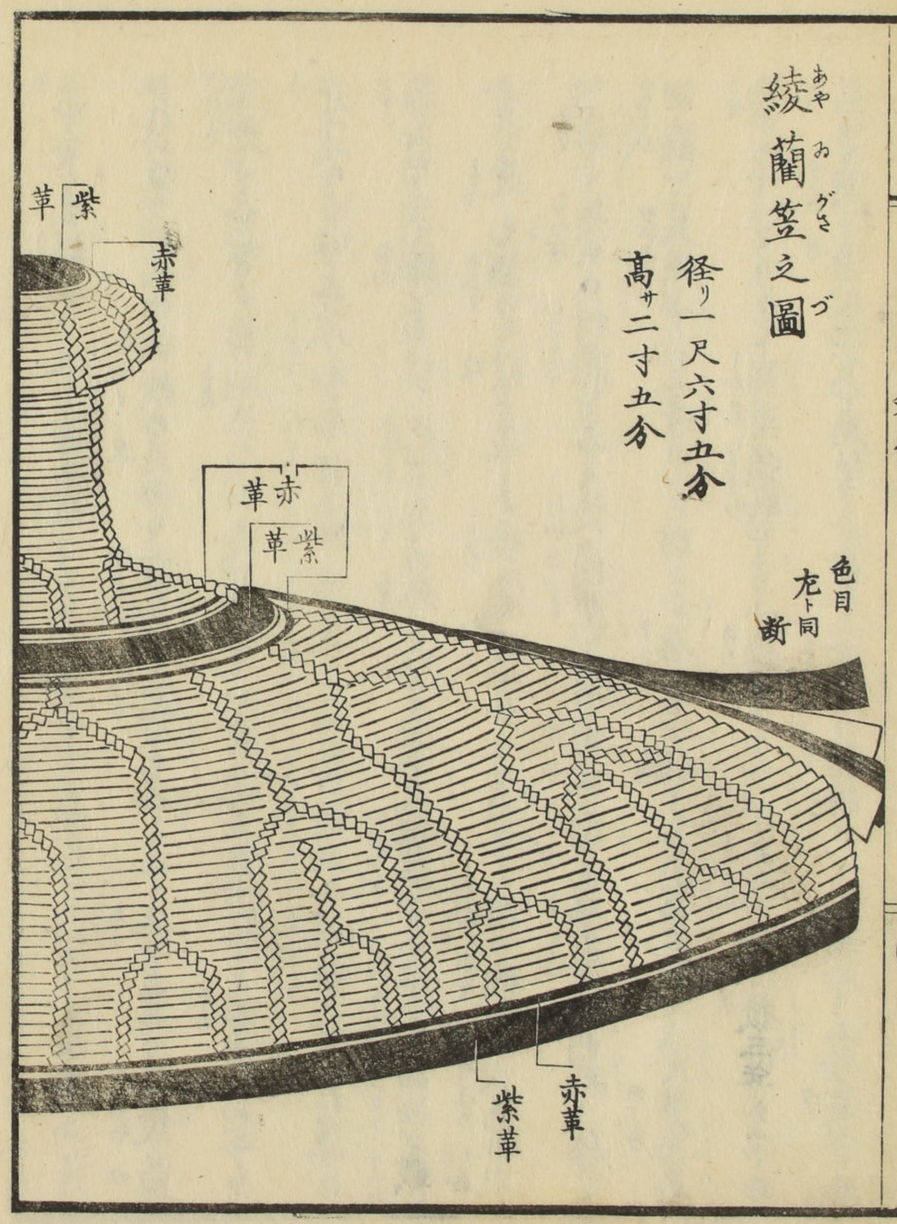
○南都東大寺八幡宮の神庫に納ひる所の綾藺笠とくるうり是いふく天平勝宝二年より天文八年の頃まで轉轄會とくる祭禮行ふれ〳〵時渡御の節に用ひ〳〵物とぞ其形最古雅にして藺と以く作つて麥藁を上と裝ひ紅白の結紅紫の革ホと以く飾ヲ裏い藍染の布とろう紐も同じき布を用ひ抗を付ぢ是い烏帽子などの上にも着るものにる故とぞ

玉函叢説綾藺笠の條より〳〵くの笠の中に綾藺笠のごくたいやう成い迄されば弓射もさらぬ増く馬ちぢ走く射ま笠の右の縁ひぢくりて弓の弦つも障らぢされば之を流鏑馬ぬい必ぢ是を用ゐる昔の武士い常に心用意ふ〳〵て〳〵さぬふ馬にのりてもふ行ふも胡籙ゐひ鞆ヒ弓ゆりてもと有つれ旅いさ〳〵ちりかる道の程〳〵ふい綾藺笠と着たるぐ〳〵此笠の内ぐ雨よくる料ぬ〳〵ぢ日とさくる料より久〳〵日ふ照さくれば目うすくちぢて弓ちども射ふ〳〵ぬれぢより石山の記録の画ふと雪ふく積りて今もや〳〵降ぬちるふ綾藺笠着ると書られば堪んちどい是と着ちや有ぬれどい〳〵く雨ふんふちと着つべ〳〵もい〳〵ぢ今昔物語ふ平惟茂の藤原の諸任ふ夜討ふせ〳〵れて女の姿ぬちりて難とうけて後郎等の外ぬいる五六十人馳付るふ出合て諸任ヲ戦ちて道と酒のみ寝うべ〳〵と量りて押よせる出立ぬ徘の襖ぬ山吹色の衣と着〳〵夏毛の行騰とふく綾藺笠と着征矢三十ぬ雁股ふんぬ〳〵びる胡籙と負握ぶとる弓のうと所々ぬ巻ると持うち出の太刀ぬと芦毛の馬の七すぢりうて進退逸物ちるふ乗〳〵り云々且前九年後三年などの画ふも戰の場ぬ此笠と用ひると所々ぬ書う猪狩とても軍に〳〵ふれぢ支ゆ

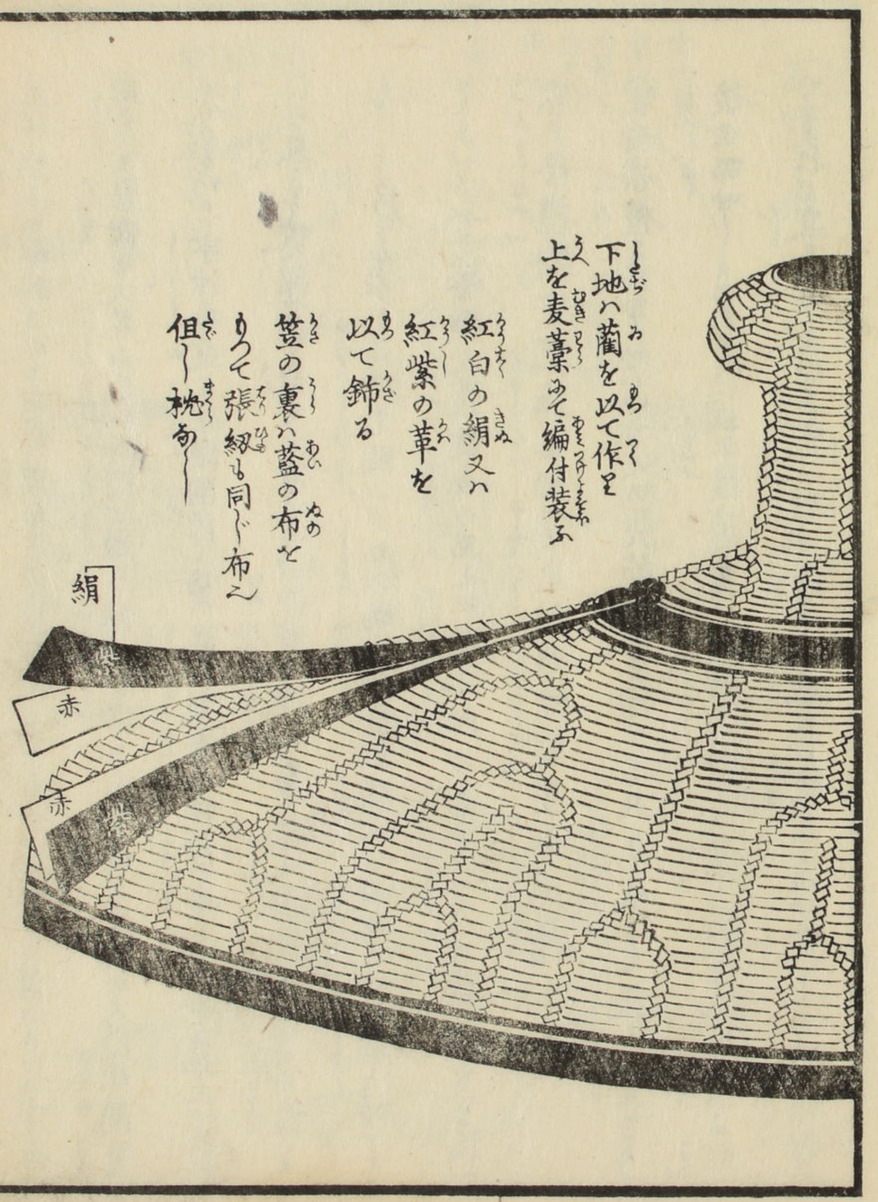
綾藺笠之圖

径り一尺六寸五分
高サ二寸五分

色目
左ト同
断



下地ハ藺を以て作る
上を麦藁にて編付装ふ
紅白の絹又ハ
紅紫の革を
以て飾る
笠の裏ハ藍の布を
りて張紙も同じ布を
但し桃布



又流鏑馬い猪狩よりくふれば猶もそれよ戰の場ふも着ぞぶさめよも着るるべく亦同書よ東國の人花山院の御門と過く無礼と語るといふる條よ東國の人乃綾藺笠着るいり宇治拾遺よ信濃國にく皮の湯よ觀音の沐浴の事らいる中よ年三十の男ひげ黑きぶ綾藺笠と着てと有されバ往昔ハ旅行ちどふも用ひて今の菅笠よ如くいとあるべく其形左圖ふる処の物よ限らび其人の好よりて種々つくりたるん乎七十一番職人盡歌合の画よ田樂法師の着る笠も此綾藺笠よ比び春日祭禮圖會云一萬法師裝束括袴綾藺笠偏木役云く

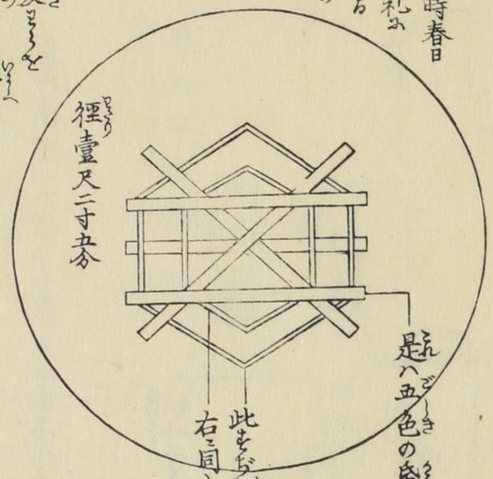
當時祭禮よ用ゆる処ハいろ〳〵の綾藺笠とうけ〳〵と只色紙よて張〳〵笠ちり後世略せ〳〵ものるとび或云綾藺笠ハ烏帽子の上よ着とれハるるくの笠よ超てよれど直よ着とれいさるべくけり〳〵馬ゑども馳れば後さゑよぬけ〳〵當時ハ猪狩よ

烏帽子着べくもけるぬい騎射笠こと相應とべ元とそ

七十一番職人盡歌合田樂之圖

當時春祭礼ふ用ゆる笠の圖

表

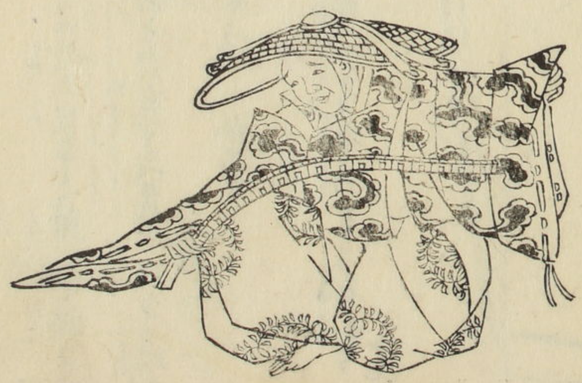


麦ゑを張るハ昔の製の余風といべ〳〵

春日祭禮圖會

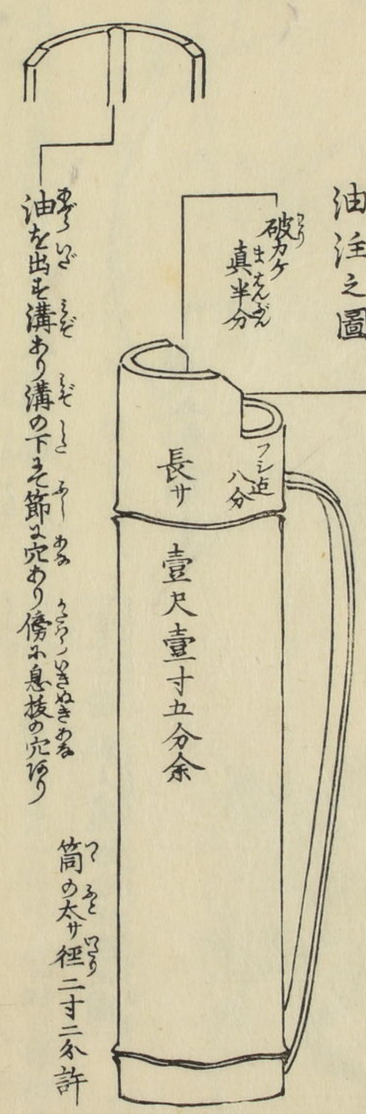
一萬法師

地ハ總赤紙を張
裏ハ縁二寸許
赤紙を廻し
余ハ白紙ちり

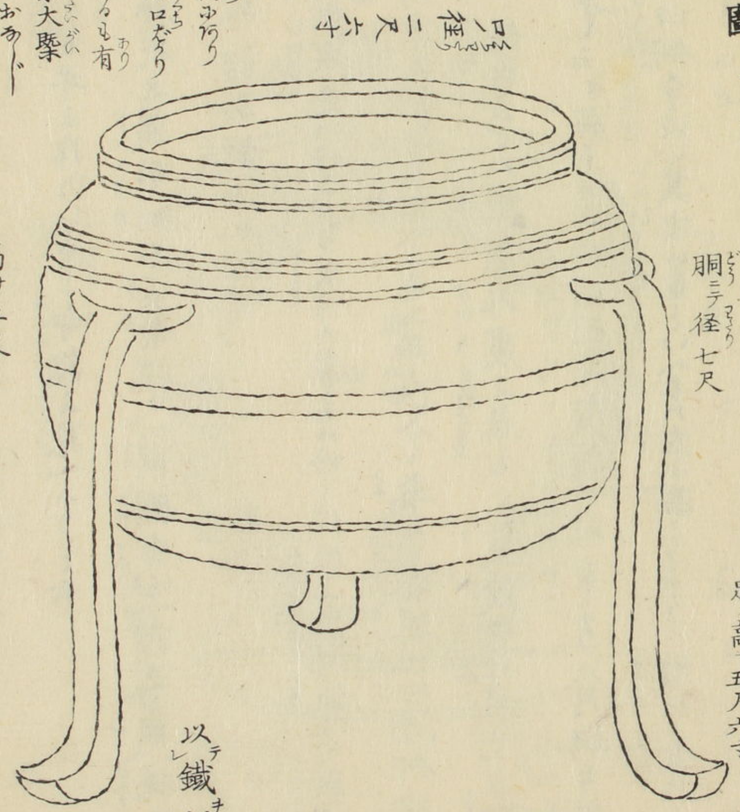


因こ云曾我物語ゑ冨士の牧将の所ゑハ薄紅のうゝ打るひをゝりんの竹笠
まゝ紗金ゑて裏うちたる浮彼の竹笠ゑど見へるハ竹の皮ゑど薄くして編るゝと
中ゑ裏表と張るゝのあやされば綾藺笠のごゝたいやうゑハ有ざるべけれど殊ゑる晴ゑ
まべ風流ゑ出てるゝいろさゑゑも常の将の例ゑそうゝざゝ為べゝ

春日社神燈
油注之圖

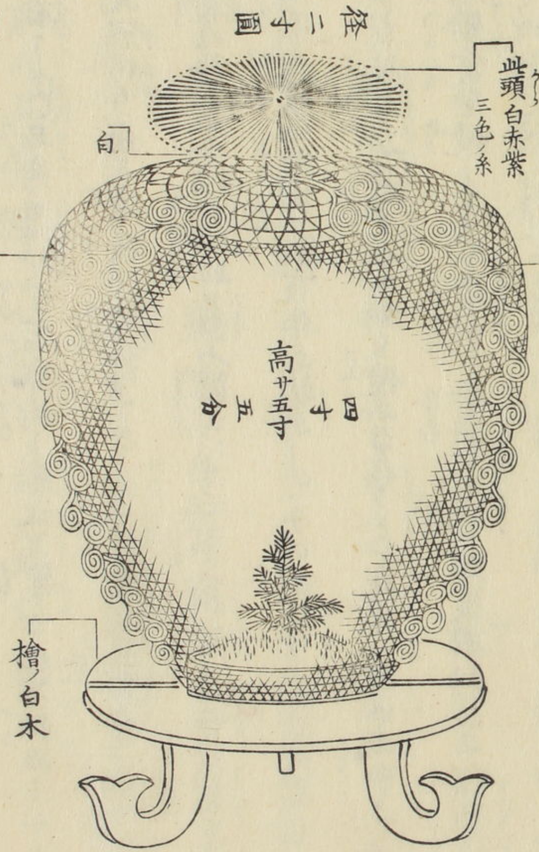


興福寺大鼎之圖　俗ニ大湯釜ト云



○南都興福寺の大湯釜い往昔當寺ふちんで戯法修行ゐ時湯を沸せ〜
ゐるゝで永久五年ゑ作りしよ〜寺記ゑ見へゝると云
三戈圖會云歴代之鼎形制不一大者謂之鼎圜弇上謂之鼎掩上小口
也附耳在外謂之鉄〻云〻
○公事根源云撰虫是いるゞち式ゝる事ゐいゝ〻殿上の逍遥と殿上人ども
遊びく嵯峨野ゑゞくむひく虫と籠ゐゐ〜ひゝく奉る是い堀川院の御時ゝ始
おなゝて松むし〜鈴虫ゑゞい誰人も内裏ゑ奉る又賀茂の社司ゑゞゐ仰られも
めされゝるゝゝ云〻按ゞるゐ今尚例年賀茂の社家ゝ八月朔日内裏ゐ
虫と献ゐい此日例ゐゞし其虫籠といへゝ左ゐ圖とゝゞく檜の臺の上ゐ曲
物と置苔と盛檜葉と立これゐ虫と中ゞ〜せ上ゝ壺ゑ似ゝる籠と覆ひゝ

虫籠之圖

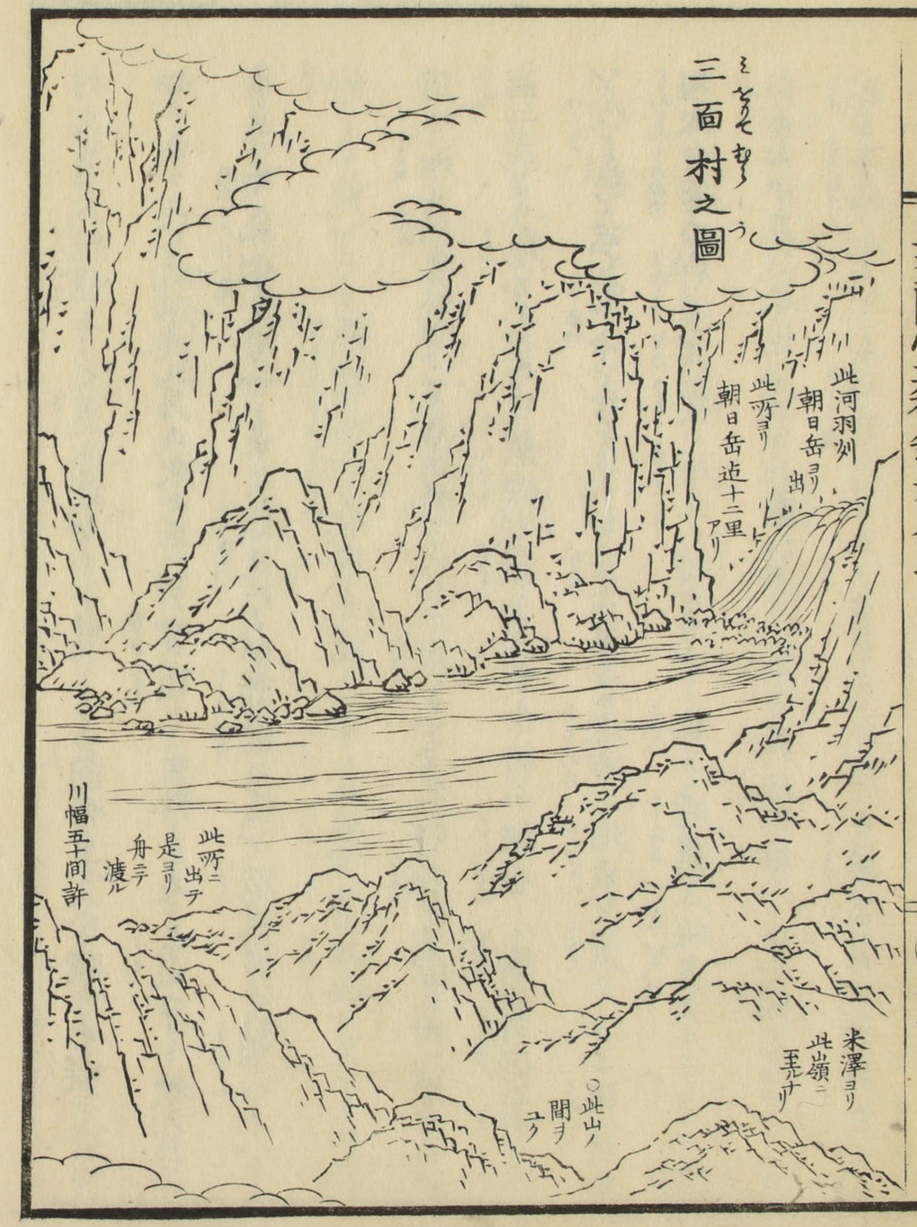


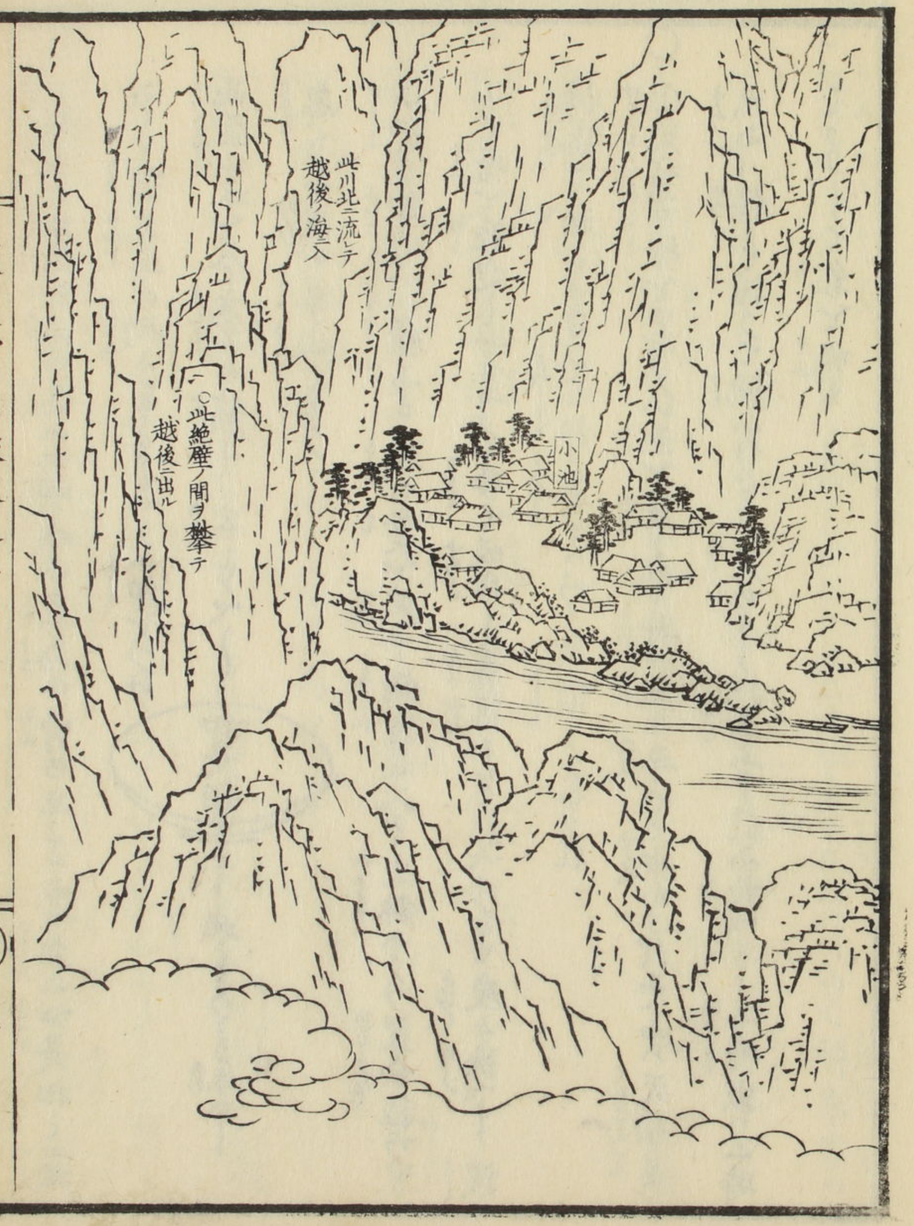
例年八月朔日
賀茂社司獻之

○出羽國米澤の北二十里許ふ小國といふ処より是より三里北ふ折戸といふ村より家數七軒ばかり有此処より又三里絶壁と踰こと三面にして処より其往返溪を渡り岸を踰路絶こと有と雖只岸の畔を千轉百折して之を攀ぢて約ぬるふ凡五里許を經て大河に向ふ家數九軒許まばらに有是則三面より獨木船二艘を以てこれふ往来し此里に小池大炊助といふ隱士にして池大納言三十二代の孫なりといふ所持する雜器武器の類皆數百年の物ふして今の制ふ倣ひ原此處ハ民家五十軒も有しかども数年ふ過て今の如く僅ふ五軒ばかりとぞ此地一町四方許ふして四面皆萬仞の絶壁雲を侵して天を管中ふ望ぶに地ハ越後國村上の領内ふて矣より毎年飯粒數石を賜り又米澤矣より年々米二十俵を賜る米沢を小國より極月ふより雪の上を踏物を負て至る然らざれば通路をべき道ふ

村上まで絶壁ふして更ふ道なし十里ばかりの間雪五七丈も積りて凝て石の如くなる上を通路ハ五月の末ふ至れば雪消て通路をべき道なし秋九月ふ至れば冷氣催し男女ともに熊皮および諸獸の皮を服ハ男子ハ深山ふ入て鎗を熊をとる熊膽及其皮を村上へ出し年々の塩噌等其他もろもろの入用の品を代をふより一ヶ年ふ熊三五十獲とりこれを貨て凡百金餘ふ及び尚二矣より賜るところの飯粒を戴き二十余軒ふ配分して聊の田圃ふ野菜を作られを以て露命をつなぐとぞ夏ハ男子ハ麻布の短衣を著て女子ハ彩色の短衣白布の脚布其髪ハ唐土の婦女のごとく都て聞傳ふ蝦夷人ふひとしく南部の山中及び肥後國ふも此類ひとり遠き異國の事とのみ聞ふせしが近き吾邦ふもかくる形勢のいるふふとぞ米澤の藩臣某の物語なり

三面村之圖


此河羽州朝日岳ヨリ出
此所ヨリ朝日岳迄十二里アリ
米澤ヨリ此山頂ニ至ルナリ
○此山ノ間ヲ流ル
此所ニ出テ是ヨリ舟ニテ渡ル
川幅五十間許


此川ニ流テ越後海ニ入
小池
○此絶壁ノ間ヲ攀テ越後ニ出ル

○玉誉上人琢淳和尚の傳に云咽喉に魚鳥の骨の立るに盃に如是相と墨
にて書文字の倒に成るを口に印とつけ
此盃に水を入て文字の筋より呑もべし　如是相　此ところより呑べし
忽ちに抜る事妙なり

○小兒の胎毒頭瘡に桐の葉を煎じ銅盥に入て火鉢に置余程ひたし
て瘡を洗べし七日して委く吸出し蓋落るなり其ひとも度々洗べし濃
汁出て治するなり尤押薬に疑とあれ

○小兒鵞口瘡とは乳を飲ざる時に死に及ぶを少々是に天南星を
末にして粘して紙に延べ足の裏に土に張べし二時或に三時
ぬるして乳を吸なり

○血止の方并金瘡に用る反魂キリンケツ此二味を青木の汁にて解奉書の
紙に刷毛にて引なり疵の大小に切て附べし奉書の紙を蒸籠に入
よくむし拈て薬を引べしさて時に紙をかへて用ひ蒸て乾しむ時
に綿にて和らかなる物

○口中にれたれたる時に松葉三本山椒十粒塩を少し入煎じ含てよし

○湯火傷に成て有ものなれども別て女子の顔に成ては焼所にて生涯
の心痛なり此方に疵つけて痛を止め皮肉故のごし

唐黒砂糖少し鶏卵の白實の汁とを右砂糖と能交ぜ鳥羽にて幾回
もつくべし但し卵汁にて和なるに時に水を少し和にして作べし

○小便閉て通じ難きに枇杷葉麻黄等分甘草少し加へ煎じ服すべ

又杏の黒焼大ふよし　但しゆんたの実と丸のまふて黒焼ふすべし
右両法ともに水腫病ふ用ひてよし

老人の小便閉ふハ麥のめゝしと服してよし

又茄子花の陰干十ヲ甘草二分此二味と刺煎して服するもよし

又茄子の蒂心とゝろ皮ごゝろと黒焼ふして細末して少し膀の中へ入紙と
ぬりして蓋ふしてよし

○痛風ふハ厚朴陳皮半夏葛根大腹皮白术升麻茯苓柴胡右各二匁
藿香壱匁五分　紫蘇六分　甘草小人参各一匁　奇効の方なり

○破傷風竹の横ゝ土中と這ひ其根の先より出る筍とゝろく土とさゝ
搗摧き粘と少しづゝ能移り疵口と少し除くごゝろへ塗つけ紙とゝ
さゝて上ゝろ張ゝ蓋とゝ三時ごゝろの中ふ悉く吸出をなり

○手負又ハ怪我ゝて大ゝ斬ゝふゝ生馬と一味粉ふして疵口ふふりかけ木綿
ゝて括りかけば縫ごゝも疵愈ゝる又牛馬の煩ふハ何病ふても生馬と用てよし

○婦人乳汁の出ゝぬふハ黒餅米五合　大麥五合　牛房實六匁　莒實四匁
蜂巣十匁　都合五品煎じ用ゆべし

○瘰疬梅肉　酸漿實　鰕鼠黒焼　薄き粘ゝて交ぜ能練て木
綿ふれて塗て指の爪先とゝみて指と巻ごゝ熱ふく乾く時ハ湯ふく
ゝ一日ふ一度づゝ巻ゝべし

○腹痛連年毎日ゝて息ひとゝく出ふゝ癪ゝ病名ゝゝ証
ゝ此薬と用ゆる時ハ黒さゝの下ゝ痛やむと期ゝて薬と休むべし
紅梅實十匁　藍葉七匁　若蓬草五匁　右ゝれも黒焼ふして白湯ふて飲下ゝ

又酒毒の痛留飲の痛の者ハ与へ速功を得ん医術験ある者ハ与へべし

○陰門陰莖ものの痒くて堪がたきハ終ハ毛髪の抜るハ及ぶのゆゑ是ハい蛇床子の細末ハ布苔を少し入大指ハどの枕の如きものと縫其中ハ藥を入土堝の類ハて煎じ詰ハどハ温して陰門ハ当て込て四五度ハして治を外の痒きハ蛇床子と澤山煎じ度々洗ハべし速ハ治を

○齲歯ハ百足の黒焼を虫くひの穴へ入べし治すること奇なり

○痢病の熱毒をさるハ粳白米寒ハ晒十匁餅白米同上挽茶三匁胡椒上品四匁甘草三匁右五味各細末ハ水白湯茶何を用ひるもよし萬ハ合ハ此藥ハ上々様暑中ハ召上るる霊方なると玉餐上人授る所ハて利疾の毒を去快く通じ腹中を温め食毒を解し霍乱寝冷ハよし

和名カワラヤナギ　弱蔓草

漢名未詳

痢疾ハ煩ハ者此根を煎じ食も甚妙なりと云

柳の葉ハ似て根大く上皮樺色内黄色小根もて芋の如し

○金具釘鍼の類を蹈抜〳〵又ハ折〳〵肉深く入るゆへ薤の葉を噬ゆ潤〳〵是を其立る口へ多くつけ其上を木綿ゆゑ括り置ハ自ら抜出るもの

又錢釘針の類をのみくだ〳〵呑るゆへ此薤の絞汁又ハ浸物などゆゑ澤山ゆ食されば金具を能くゑみ纏〳〵大便ゆ下るもの又小兒の錢などを呑く喉ゆ止り指も入ざる事なり是ゆも薤をよく〳〵もみて汁を口へ入れば忽ち喉をこして腹中ゆ通じ入る其後薤を多く飲されば大便ゆ下るゑ此方ハ或公の授ゆ也

御秘傳なりと聞ゆ按ニ韮薤一類ゆ大小二種ゆり韮葉ハ六七寸麦門冬ゆ似もり薤葉ハ一尺半ばり小き水仙ゆ似もり此藥ゆ用ゆりゑ混ぜ〳〵ば左食〳〵と能よれものもり空地ゆりん家ゆ種をえて よ〳〵

○大能膏　黄蠟大　唐蠟小　白蠟中　松脂見合　麻油同　古き油を用ゆべ〳〵

一切の腫物の痛をとゝめ濃水を吸出をて即功あり

○和黄膏　和白蠟　黄柏　唐土麻油各等分一切の腫物を散を藥ゆ〳〵痛をとさるを頗る妙もり　右両方ハ長崎道悦の傳

○軽粉の毒を去ゆハ山椒を六君子湯ゆ入四五十服用ゆべ〳〵　皂莢を去和の蒼朮を炒て用ゆ又藥用も仕がたき者ハ山椒ばかりを常ゆ食ゑの時ゆ用ゆべ〳〵　粉毒を去妙術ゆり　同上

○如神散　川芎　大黄　忍冬各四匁　土茯苓三匁　橘皮一匁　茯苓一匁　羌活三匁　反鼻三匁　右細末〳〵白湯ゆて下れ諸瘡の毒結く裡ゆ入り骨痛又痔瘡便毒痔瘡黴毒ゆこれを服をれば穢毒ゆ〳〵下るもの

○木通大　當飯八分　川芎八分　黄蓮二分　黄精五分　甘草三分　鹿茸三分　右瘡毒を去〳〵身體を同復せ〳〵る奇方ゑ　右両方養壽院家の傳ゑ

○疥瘡の内攻〳〵るゆハ伊勢鰕を煮〳〵喰べ〳〵又ハ伊勢鰕を煎じて飲もよし

○河豚の毒ハ烏賊魚の墨と呑べし又河豚の善悪を知るハ肉を少し火ハ炙て試るべし焼ものハ毒なし焼ざるものハ必毒なり食をべし干鰒を製するも毒なる魚ハ乾さざるべし乾き安き毒なしこゝ

按ずるハ河豚の説區々なるべし尤浪華ハ於ハ怖るるの半ハ過されども兵庫の津の辺ハ恐るるもの些し是ハ其料理を能心得ざるゆ故ハ中毒ある医と云則腹中ハ腸腑の類ひと殘らず取去て肉の余ハ食せざるがよし

本草綱目ハ其肝及子有大毒といへるハ符合せり一説ハ真鮴ハ毒なりて白鮴ハ毒なしと云其形鯛鮴ハ彷彿たり故ハ一年利潤ハ惑へる賤き魚高賈鰒真鮴を鯛鮴と偽り賣りを其價の賤と以て霑て食せしに者忽死せりとなり是ハ諸魚ハ鮴ハ煮ざれものあれば再三煮て其魚賈も外と蒙也とたゝせざれば人ハなること河豚のごとなるべし

又或云播州赤穂の辺ハ只一個も食する者なし必毒ハ中といひて若漁夫の網ハ入ることなれば則海ハ放つなり此故ハ赤穂郡の山中ハ櫛の多く生る処ハて其子自然ハ谷ハ落ハて海ハ流を出る其子を喰ひて河豚ハ歯黒く染ると是を喰へば忽死と尤其實を多く喰ふなれども其子其葉のみ散て流れて水海ハ入ものいづれも此水ハて育て鰒なれば毒なくて毒なるハ決して櫛ハ至て河豚ハ合ものが毒を發する故櫛の木ハて鰒を煮焚とることも禁ずべきなり言傳ハ又長崎赤間ヶ関の辺ハ多くハ河豚ハ福の音義なれば祝儀事の贈物ハ用ひて大ハ珍重なる斯有バ一概ハ言ずべし其中る者ハ料理の精疎ハもとより又時候ハもとより又食する者の身體壯健と不快とハも寄じ既ハ時候を辨へべ利潤ハ惑ひて賣ることを禁ず給ハ御觸なるべし

時候の心得第一なり又本草綱目に河豚に三種あり其色炎黒文點あるを斑魚と名く毒最甚し凡これを煮る煤灰中に落るを忌とす且此魚を樹に挂バ立どころに其木乾枯又是に狗膽を塗るに其枯る木復栄盛と云く

是を喰る日は一日の内に湯藥を服もべからず尤其毒に中るものは槐花を微炒乾臙脂と等分にして細末にし水を服もべし

飲食禁忌に河豚に煤焔 荊芥 防風 菊花 桔梗 甘草 烏頭 附子に忌と云昵く食もるものあらばれども若食せんと欲せば魚の鮮を撰料理を第一に精密に食合をよく忌べし尤肝鰍の類は取捨べし尚同じくは食せざるに如ず其煮る汁に翌日は臭氣甚しきを思へは悪魚は違とす

されば心なしん者食もべきものにあらず

○安永三年東武より曲屁福平といへる者浪花に上り道頓堀にて屁の曲撒を奥行し古今無雙の大當なり尤屁の曲といへは昔より言傳へし階子屁長刀屁などいへるものは更なり三絃小唄淨瑠璃にて面白く屁を放てみるに実に前代未聞の奇觀なり委くは風来山人の放屁論に見たり是を以て證とす

放屁論云先頃より両國橋の辺に放屁男出たりとて評議とりどり町々の風説なり

夫熟惟バ人は小さき天地なれば天地は雷なり人屁は陰陽相激するの声なり

時に發し時に撒こと持まえなれば言傳へし階子屁數珠屁は言も更なり礮すぐき三番叟三ツ地七草祇園囃犬の吠声鶏屁花火の音は両国と欺く水車の音は淀川に擬す道成寺業児童端哥やり屁は伊勢音頭一中半中豊後節土佐文弥半太夫外記河東大薩摩義太夫節の長き事でも忠臣藏矢

口の渡のごゝ次第一段ゞ三絃淨瑠璃ゟ合せ比類なゝ名人出ると聞とも
見ぬゝ咄しゟ多くゝと行て見ゞゝて三三輩打つれそ横山町ゟ両國橋ゟ
廣小路と渡らゞゝて右へ行ゞ普語花咲男とゝゞゝ幟を立て僧俗男女押あい
合ふ中ゟ先者板と見れゞ怪しの男尻とゟ辛る後ゟ薄墨ゟ隈ゞ彼道成
寺三番叟ゟんど數多の品と一所ゟゟて面きゟるゟゟ夢と面く筆意ゟ似
ゟれゞ此沙汰きゝゟ田舍者のゟ来かゟて見ゟゝゞ尻かゝ夢と見とゟ疑ゟん
とゝゞゟれゞゝ木戸とゟれゞ上ゟ紅白の水引ひきゟゟ彼放屁男ハ囃方と共ゟ
小高き処ゟ座と其爲人中肉ゟて色白三日月形の撥髪賞奴縹の單ゟ緋縮緬の
繻伴口上さゝやゟゟて憎氣ゟく囃ゟ合せ先最初ゞ自出度三番叟屁トツイヒヨロ
くゝピツくゝくゝと拍子ゟ次ゞ鶏東天紅とブツと撒らけ其ゟとゞ水車ブツくゝと放ゞ

己ゞ身と車ゞゟゟゞゝ車の水勢ゟ迫り汲ゟ移ゞ風情ゟサヤ入替りく
と寸出しの太鼓と共ゟ立出云〻
是ハ浪華へ上る以前江戸両國橋の辺ゟて奥行せゝ評判ゟ右ゟて其藝品
の大槩と推〻知べゝ尤大入大繁昌ゟて諸の芝居と撒潰せゝ上同書ゟ見へ
ゟ放屁論云上畧加様の曲屁と放ゟと聞ゞ又仕掛ゟんゟの疑ひ尤ゟ似られども
竹田の舞臺ゟ事ゟゟ四方四面のゟゟゞゞ屁ゟも不埒の取ゟまり何ゟ仕掛の有
ゟも見えゞゞ數万の人の目ゟさゝ仕掛の見えぬ程ゟれゞ譬言仕掛ゟりゟも
真ゟ放と同前ゟゟ衆人真ゟ放といゝゞ其糟をゟゝひ其泥を濁らして放と思
ゟく見ゞゟゝ扱つくゝと按ゞれゞ斯世智辛き世中ゟ人の銭をせゝんと千変万
化ゟ思案ゝて新ゝい事と工ゞも十ゞ十餅の形昨日新ゝきも今日ハ古く

固古きい猶古〳〵此放屁男ならい咄ふと有とくも眼前見とく我日本
神武天皇元年より此年安永三年ゑ至つ〳〵二千四百三十六年の星霜を經
とくども舊記ゑ見へ代言傳ゑも皮我日本のくちゝ〳〵唐土朝鮮をとゞめ
天竺河蘭陀諸の國々ゑも有まゞ於戯思ひ付ゝ能故ゝと云々

○安永七年戌の春豊後國の産ゑりと耳四郎とくる者と觀物ゑ出せり其藝
とくふい耳ゑて物と言ゞ一奇とゞ先始め耳より声を出し或ハ大文字屋の歌と
諷ひ大声を出せゞ竹細工の象獨楽のゞく聞へ夫より種々哥を諷ひ三絃ゑ合
せ見物を嬉ゞ〳〵む若やロの中ゑ笛ちゞ仕掛ゆ〳〵との見客の疑ひを晴さん
とゑ田葉粉を吸々声を出せり実ゑ稀代の奇藝ゑりとて大ゑ繁昌せり耳ハ
声を聽を主る者ゑるふ耳を以く言語を發をると其類ゆくことを未聞ゞ

○寛政四年浪花道頓堀ゑおいて水豹とくる獸を觀物とせり其長凡四尺許
頭の形鼠のゞく毛至〳〵短く脇ゑ翅のゞとゞ鰭ゆり其色灰より少し黑〳〵
能人語を覚へ水中ゑ生ゑる鰭泥鰌の類を投食ゞ忽水中ゑ飛入水を
ゞりて是とゞくゝ水上ゑ浮上ゑる又口上ゑ隨船の形を皮或い横ゑ寝ゑる姿を
〳〵其余種々面白き曲をとゞと奇觀ゑり其皮水ゑ濡る時ハ恰も繻子の
如く至〳〵美〳〵按ゞるゑ此獸ハ水豹ゑゆ〳〵ゞ水豹ハ海中の豹ゑて虎ゑ類
とるゑゑり蝦夷の海中ゑ有く丈四五尺灰白色ゑて豹の文ゆり和名阿
左良之〳〵とくふ本草綱目ゑ豹ゑ水陸の二種ゆりて海中の豹と水豹とちゞく
文選西京賦ゑ搤水豹とくふゑの是也とゆり此ゑ觀物とゑる物ハ正〳〵海獺海鹿胡獺
の類ゑるべ〳〵獺ゑ三種ゆり川ゑを川獺山ゑを山獺海ゑを海獺とゆゑ

和漢三才図會に海獺處々の海中にあり狀獸と魚と相半する者なり其大なるもの六七尺頭面肩に至る牝處に類して耳ふく眼大にして利齒ありて背身毛細密にして短く微赤く土器色にして美し兩鬢の末黑く手に似たり是より以下腹大に肥尾窄く尾あり長三寸許亀の尾に似て黑く尾と爽とに鬢ありて

一説に海鹿は即海獺なり紀州に海鹿島より多く群居を毎に眠を好んで島の上にあらず鼾鼾とかく唯一足四方と撿く漁船来れば則誘ひ起し悉く水中に轉入くと游ぐと甚速くして捕がたと云此に圖せるものは此説に能符合せり然れども全く水豹にも有べく海獺とも云べし

○扶桑見聞私記辨僞 安永五年丙申冬十月廿五日江府扶桑見聞私記七十六卷平治元年より建保元年に至る迫の日記なり序文なくて正四位下毛利大膳大夫大江廣元入道覺阿と姓名を記し年月を記さず其序に廣元見聞する所を記せるよし見へたり然れども実は廣元の記にあらず偽書なり或人曰享保年中加藤仙安といふ者ありて古戰の故事を談ずるを以て水野監物が臣となり仕ふる後に仕を辞して去て浪人となりて江府青山に居住し姓名を改て須磨不音と号し

此不音扶桑見聞私記藤九郎盛長私記と偽作して古書なりと欺きこれを賣る莫太の金銀を得たり見聞私記初め大江廣元日記と題号を建て賣るが松平大膳大夫毛利家也より召められて後は扶桑見聞私記と題号をかへ改めて賣るるに然るに其偽書なりと人皮を知りて廣元の實録なりと思ひて信仰をる人多し彼不音は偽書を作て人を欺き金銀を貪り取大賊其罪死刑なるも當るべきなれども皮顕れざりて刑を免れしが彼が大幸なり不音が爲ふ誑されて其偽書を信仰をるは傷ましき皮なりと云へり

○洛西嵯峨清涼寺の什物は牛の華鬘とのへる有り縁起は云へり或皇女の母后の生れなりて御車の牛と成りは其罪障消滅菩提のためとて其牛の皮を以て華鬘を製し佛前に納めのへよし是大なる偽作なり駿牛繪詞云唐庇い安嘉門院の御牛比白川百なり初生の始より殺くにいさなり辛れば背も大は容儀も類なき程の牛なり女院御秘藏の次第のべ盡し難きのなり

真影を華鬘は写されて清涼寺の本尊帳はなげく今あり云へり

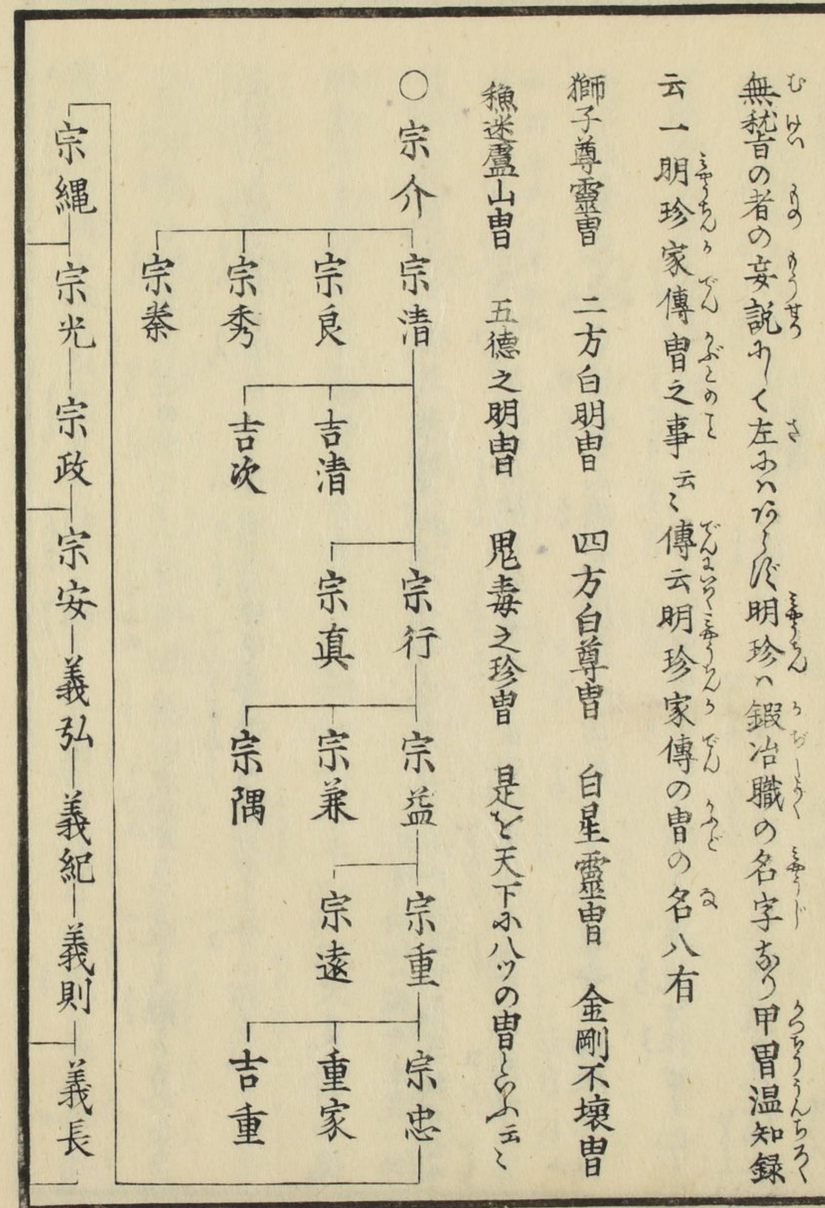
和漢三才圖會云牛華鬘、安嘉門院高倉帝之皇女御車牛名唐肥大美毛而女院最所愛寫其牛像於華鬘掛清涼寺本尊之帳見駿牛繪詞按牛死哀一悼之余寫其形吊菩提矣然好事者立異說示因果恐妄誕也女院不幸耳されば女院の年来愛し給へ御車牛の死せしと悲嘆の余其牛のもがさを写し華鬘は画せのひ菩提の爲めとて清涼寺の佛殿に寄附しのふりの然るを後世好事者の因果を示してさもがくと異說を作せし也

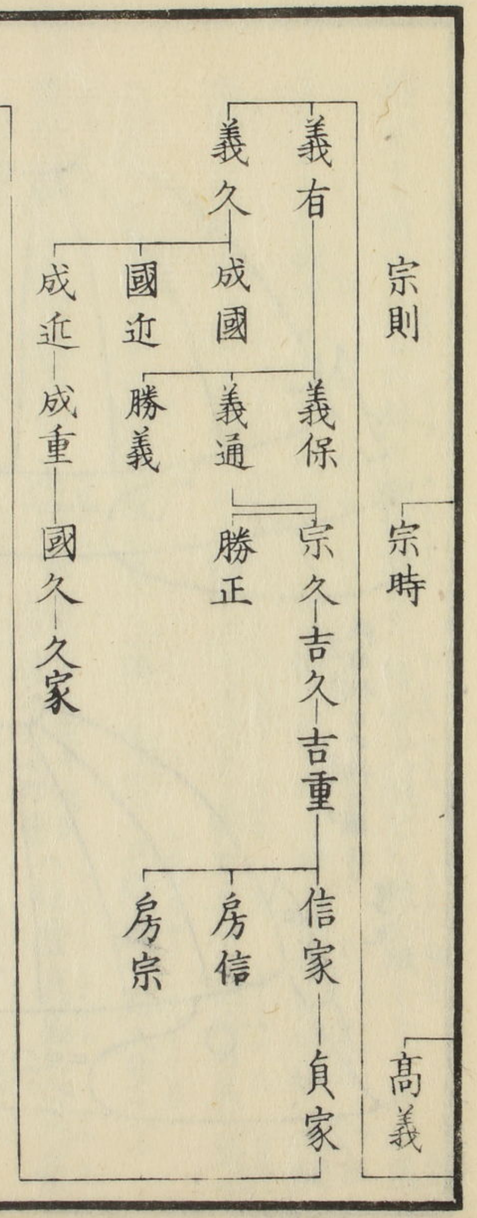
○今世火燧の木の面は本家明珍と記せるこれ一說は享保九年辰三月廿一日大阪堀江橘通二丁目金屋喜兵衛借屋妙智といへる老尾の宅より火出て大火に及しより妙智の

火ハ能出ると又る譬りとして文字を書更明珍と申し是ハ言傳ヘれども是ハ正しく無愛昔の者の妄説なり左ハ明珍ハ鍛冶職の名字あり甲冑温知録云一明珍家傳冑之事云ク傳云明珍家傳の冑の名八有

獅子尊靈冑　二方白明冑　四方白尊冑　白星靈冑　金剛不壊冑

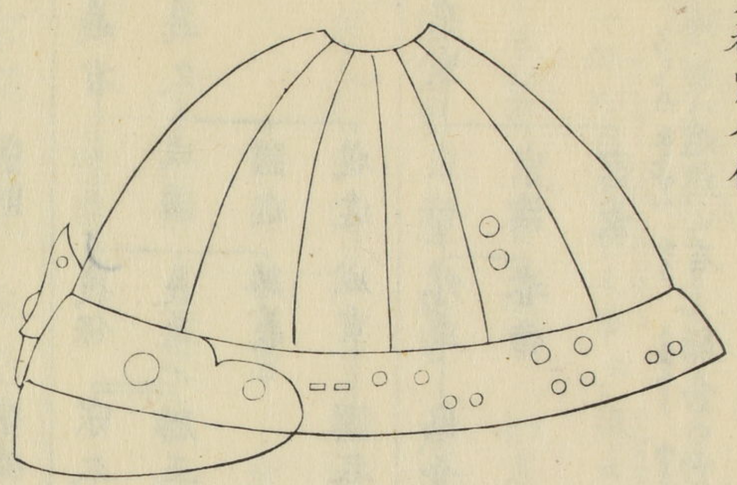
鍬迷盧山冑　五徳之明冑　鬼毒之珍冑　是ハ天下ハ八ツの冑ハ云ク



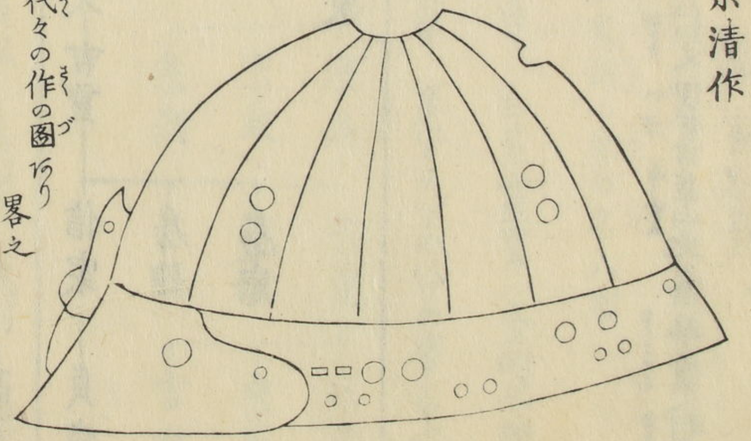


明珍初ハ越前ニ有り鎌倉の雪の下へ行又伊豆の韮山北条早雲へ行ケウ小田原へ行故ニ雪の下小田原鉢ふどゝいふ有何も明珍作也

元祖宗介作



宗清作



此余代々の作の図略之

按ずるに明珍は曽の鉢の鍛冶職なり後世火燧をも錬て販ひより其名残もとむ余の鍛冶は勝れて明珍の火燧は錬よりと以て世は名高し故終は火燧の銘をなかれるなり然るに後世其火燧と共に火口をも高ひて是も明珍の名を袋に出るせしより今は火口の製法家の名と心得て人も有て其濫觴を知人少し

○京師北野上七軒西方寺真盛庵江戸坂本西教寺末派天台浄土宗尼僧住ヘ往昔真盛上人の開基也當寺の尼僧例年蘿蔔の青葉を寒氣に陰乾して極干乾して後細末とし青き粉を製し黒大豆を煎て塩水を潤して大根葉の青粉を衣まみ菓子を製に則諸方の檀家へ送て時節の音物とし俗は是を真盛豆と号し當寺の名物とせり然るに洛中の菓子屋ホこれを擬して黒大豆を砂糖を塗青豆粉を以て衣とし或は青苔を衣として真盛豆と号し京都の名物とし今は浪花ホ

も是を学びて真青豆新青豆などと号して販ぐ夏こゝろみて花其製して販ぐ者も需むるものも更に京師の真盛庵の盪觴と知るのみ浪花にも有べし其原たる京都にも知人希なりと聞り

○

誓古とゝるゝ古を誓の事にして尚書堯典曰。若誓古帝堯。孔安國傳云。若順誓考也。能順考古道而行之者とさて舜禹皐陶もまた同じ後漢桓榮傳にも太子の傅となりし時に曰今所蒙誓古之力也可不勉哉と見えたりて北宋徽宗帝が宣和殿の傍に誓古博古尚古の三堂を建られしも誓古にてい博古たゝびやさ尚古もゝがとうる専要の誓古の二字を我邦の近き世ふいふふ傳へ誤りて諸藝の講習のことを誓古とゝろえ誓古能誓古角力と唱へ是ホハ猶末だ卑しゝたび誓古浮瑠璃惣誓古より移りて戲場の修練所を誓古

場と号又是を百倍せゝ市中に充る誓古屋あり其主必ず寡婦多く専児女を門子とゝして秦爭三絃子と教道しゝ或い鼓太鼓のちりゝに俳優めゝる媚態をあゝ誓古の二字と過つの殆ど窮まり堯舜の靈ゝゝそれ是を何ゝゝいゝ能つのぞあゝび童蒙を此故ゝと告知らしめ誓古々々と徒らふ言あぞせる輩ゝも馬耳の東風牛前の彈琴あゞゝ傍其汚濁を諷ゝ誓古の二字を清めあぞゝれぞせゝも堯舜の爲名とび正とゞ忠をれば是も誓古のひゝつちゝと正宣翁の慷慨ゝく語られぬ

○

狂画師耳鳥齋い浪花の産ゝ京町堀三丁目に住ゝ俗稱松屋平三郎と云其始酒造家なりしが後骨董舗を業ゝ狂画と得ゝ世に名高ゝ就中俳優角抵の姿を画くふゝゝ様ようゝせども其情態をよく摸ゝと頗る雅致ゝり

又滑稽の才ありて戯作ともあせり義太夫の道外淨瑠璃小達〜松平と称せらる浪華一畸の人物とつべし

○司馬芝叟い俗称芝屋勝助とふ原ハ肥前長崎の産なり〜母い圓山の遊女なり又い来舶の清人なりと聞き儒よりて医わりて所謂一畸の人物なり享和の頃浪華に来つ〜淨瑠璃と作る箱根霊験壁仇討新吉原瀬川仇討ホなり又読本とも著述し哥舞妓狂言の作ともなり〜常ホ長話とそ小説稗史と綴り自素人の好者と集てこれと講じ又此連中と組て其輩話の種と譚る時い夫と趣向として一段の長話として重の席ホ講じ一夜読切よせ〜ら此事大ホ流行して吹筑小社中多くなりて數繁昌せり其長話若干の中に蕣朝良日記の読本となり哥舞妓狂言ホなり〜其紫殺〜題して又義太夫の淨瑠理ホ作り油油屋与五の読本〜稲と題して読本又作り又哥舞妓狂言ホ作り稲説ホいろ〜作りなして奥行す

其余話ホまさかり畧之

○一説ホ読本小説い真の位淨瑠璃の作意い行の位歌舞妓狂言の趣向ハ草の位なりと云ふ如何ホも其説のごと〜故よ読本ハ読本ぶりの世界淨瑠璃ハ淨瑠璃本丈の世界と立て見べし哥舞妓の正本又是ま准じ知るべし

蓑茂堂雑録巻之三　終

此書ハ貸出ス